

## 4. 水族館記録 2000年

### 1. 研究・教育

- 3月24日 京都大学理学部生物系臨海実習生(第2部, 8名)の見学を指導した。
- 4月 5日 ソントン久代院生が二酸化炭素による影響実験(6ヶ月間)を, 冷却循環水(約15℃)を利用して第2水槽棟予備水槽で開始した(10月4日まで)。
- 5月16日 大阪千代田短期大学幼児教育科実習生(20名)の見学を指導した。
- 5月17日 ソントン久代院生が二酸化炭素による影響実験(6ヶ月間)を第3水槽棟実験作業室で開始した(11月15日まで)。
- 5月19日 栗原晴子院生が二酸化炭素による影響実験を第3水槽棟実験作業室で開始した(以降, 断続的に続行)。
- 5月31日 奈良教育大学教育学部臨海実習生(21名)の見学を指導した。
- 6月 1日 小田広樹氏(科技団・月田細胞軸プロジェクト)によるフナムシの採集に協力し, 南浜の排水ヒューム管出口にトラップを仕掛けて採集した。
- 7月 1日 大阪市立大学理学部臨海実習生(21名)の見学を指導した。
- 7月 7日-8日 岩部直之助手ほか院生2名(京都大学理学研究科)に, 開放式予備水槽などで自然繁殖しているカイメン類と第2水槽棟濾過槽内のベニクラゲムシを, 研究用として提供した。以降, 10月19日, 12月26日も同様。
- 7月14日 大阪教育大学教員養成課程臨海実習生(8名)の見学を指導した。
- 7月28日・31日 京都大学理学部生物系1部実習生(9名)の見学を指導した。
- 8月 4日 京都教育大学教育学部臨海実習生(14名)の見学を指導した。
- 8月18日 大阪大学理学部臨海実習生(11名)の見学を指導した。
- 8月27日 京都大学理学部生物系1部実習生(7名)の見学を指導した。
- 8月29日 白浜町中央公民館主催「海辺の生き物観察会」(小学5・6年生24名)の見学を指導した。
- 9月10日 「歩む会」実習生(20名)の見学を指導した。
- 10月12日-25日 富山大学理学部学生(1名・8日間)の博物館学実習を実施した。

### 2. 普及(報道関係は放送および掲載分のみ)

- 1月23日 名古屋テレビが, 224号水槽のコブセミエビを撮影した(1月28日6:45-8:00の「こけこっこー」で, 東海3県で放映)。
- 2月22日 NHKテレビがウツカリカサゴ(407号水槽)を撮影した(3月19日19:20-20:00の「クイズ日本人の質問」で放映)。
- 4月 9日 オフィス・環がFM放送用として水族館を取材した。
- 6月14日 紀伊民報(新聞社)が, オオカワリギンチャク・ギンガメアジ・ヤイトハタなどを取材した(6月20日付)。
- 6月24日 テレビ和歌山が, 撮影取材した(7月9日10:00-10:30の「きのくに21」で放映)。
- 7月 5日 紀伊民報・毎日新聞・読売新聞が, 当日死亡したヤイトハタ(「4. 収集・飼育・展示」の項を参照)を取材した(7月6日付)。
- 7月27日 Pasikala氏(トンガ)・斉藤正史氏(日本国際協力センター)・米島久司(近畿大学水産研究所)が飼育海水循環システムの視察に訪れ, 案内した。
- 8月17日 紀伊民報が, ヒメツバメウオ(303号水槽)を取材した(8月23日付)。
- 10月23日-24日 紀伊民報が, ユウレイクラゲ(403号水槽)を取材した(10月26日付)。
- 11月16日 水産庁栽培養殖課の岡崎明夫氏ほか2名を案内した。
- 12月 8日 工学部留学生一行(16名)を案内した。

### 3. 機械・設備

- 5月11日 排水管改修工事を行った(第1水槽棟地階)。
- 5月12日 No. 2 揚水ポンプ(第1水槽棟機械室)を修理した。
- 5月23日 パイプ支持金具の取り付け工事を行った(第1水槽棟地階)。
- 5月23日-30日 各海水循環系の重力式濾過槽(第1・第2・第4水槽棟地下室に計15槽)を、逆洗と水中ポンプからの吹き出しを併用して徹底洗浄した。
- 7月18日-9月17日 チリングユニット(第1水槽棟機械室)の冷却運転を行い、101号水槽および第2水槽棟各循環系統の水温を27-28℃に維持した。冷却チラー(第4水槽棟機械室)を運転し、第3・4水槽棟各循環系統の水温を27-28℃に維持した。
- 8月24日・25日 開放式給水配管を第3水槽棟作業室南壁に取り付けた。
- 10月16日 No. 2 循環ポンプ(第1水槽棟機械室)を修理した。
- 11月13日-20日 各海水循環系の重力式濾過槽を、逆洗と水中ポンプからの吹き出しを併用して徹底洗浄した。
- 11月13日 第4水槽棟濾過槽洗浄後に、破損していたディスクストレーナーの上蓋を計5個交換した。濾過槽から貯水槽へ濾過砂が漏出していた原因は、この破損によることが判明した。
- 11月20日 ボイラー(第2水槽棟機械室)および保温チラー(第4水槽棟機械室)を運転し、各循環系統を20-22℃に維持した(翌春まで)。
- 11月21日-12月 7日 エアリフト(塩化ビニール製パイプを加工)を、203~221号水槽のガラス両側に取り付け、気泡が展示動物に直接当たらないようにした。従来、水槽の中にエアストーンを投入し、エアレーションを行っていた。
- 11月29日 チリングユニット(第1水槽棟)の加温運転を開始し、20-22℃に維持した(翌春まで)。

### 4. 収集・飼育・展示

- 1月11日 著しくやせてきたヤイトハタ老成魚(413-2号水槽・長期飼育記録更新中・1969年6月18日入館)が、昨年の7月以来久しぶりにマアジ3尾を摂餌した。
- 1月19日 アカオビシマハゼ8尾(全長8.0-10.5cm・220号水槽「原索動物 ホヤ綱」)を水槽から採集し402号水槽(「藻場」)へ移した。1999年中に白浜町寒サ浦で採取したローブ(シロボヤ等が付着)と共に紛れ込んでいた稚魚が成長したものである。
- 1月28日 小型イソギンチャクの増殖が、214号水槽(「棘皮動物 ウミユリ綱」)で目立ってきたため、水槽の海水を抜いて、岩組み全体に食塩を直接塗り付ける方法で駆除を試みた。塩を塗り付けてから一時間放置したところ、イソギンチャクは収縮してかなり弱ったようであるが、基盤から簡単にはがれ落ちるほどではなかったため、結局、たわしでこそぎ落として駆除した。
- 2月14日 イロイザリウオ・サツマカサゴ・オニオコゼ(305号水槽)の眼がやや白濁し、アジの切り身を摂餌しなくなった。この水槽を閉鎖単独循環とし、水温を25℃に保ち、硫酸銅および殺菌剤による薬浴を行った。以降、2月21日まで、さらに2回の硫酸銅による薬浴を重ね、回復した。
- 2月15日 201号水槽(「刺胞動物 花虫綱」)で、分裂により増殖したサンゴイソギンチャク17個体のうち、8個体を403号水槽(「岩礁」)に移した。
- 3月 3日 イシダイ・イシガキダイ各1個体を、413-1号水槽内に吊り下げた塩化ビニール製のケージ(100cm×65cm×70cm)に隔離展示していたが、後面にできた穴から脱出していた。どちらか一方の魚が、何らかの刺激に驚き暴れて、厚さ3mmの塩化ビニール板を破ったものと思われた。両種は、鋭い歯で水槽のアクリルガラス

- を傷つけるために隔離していたものである。以降、このケージは撤去し、両種はそれぞれ1個体だけなので、そのまま様子を見ることにした。
- 4月 4日 トビハゼ15尾(田辺市内ノ浦で採集)を、402号水槽(「干潟」)に追加展示した。
- 4月14日 タカアシガニ雌雄各1個体を町内の鮮魚商より購入した。南部町堺漁港に水揚げされたものである。
- 4月22日 アカクラゲ1個体(202号水槽内のクラゲ用吊り槽で展示)が死亡したので、ミズクラゲ3個体(田辺市島ノ巣海岸より採集)に展示変更した。
- 4月28日 ヤマトメリベ1個体(田辺湾産・近畿大学水産研究所提供)が、予備水槽で数日後に死亡した。
- 5月 1日 カスザメ1尾(全長約70cm)を白浜漁業協同組合(瀬戸漁港)より購入し、406号水槽(「砂底」)へ展示した。
- 5月 7日 昨年11月より行ってきた、401号水槽(テラリウム・「干潟」)内の空気の保温を終了し、温風器および透明ビニール製の水槽上蓋を撤去した。
- 5月 9日 228-4〜6号水槽を次のように展示変更した。228-4号水槽：小型ヤドカリ・ヒメセミエビ類・テツイロナマコなどを228-5号水槽へ移し、石に付着するキスズメおよびニシキウミウシ・ミヤコウミウシ・アオウミウシなどを収容した。228-5号水槽：昨年12月以来、展示していた「特集-水深100-150mの底生動物 1」を中止し、生残していた刺胞動物は228-6号水槽へ移した。228-6号水槽：「特集-水深100-150mの底生動物 2」を中止し、タコアシサンゴ・センスガイ・ホウズキチョウチンなどを展示した。
- 5月22日 小型イソギンチャクが、214水槽の岩組みに再び自然繁殖して目立ってきたため、展示動物のウミシダ類を取り出し、水槽に淡水を一晚張って駆除した。
- 6月 5日 タイリクスズキ(当館初記録種・404号水槽で展示)が死亡した(全長40.4cm・体長34.0cm・湿重690g)。1999年10月1日に、白浜町網不知(田辺湾)で釣獲したもので、当時の全長16.0cm。
- 6月 8日 クマノミ・カクレクマノミ・コバンザメ各1尾の提供を、白浜町内のホテル「白浜御苑」より受けた。ロビーの水槽で飼育されていたものである。
- 6月16日 スイジガイ(白浜町見草産・1999年10月6日入館・殻長11.2cm・303号水槽で展示)が死亡した。なお、5月10日の計測では、入館時と比べて、殻の大きさには変化がなかったが、湿重が271gから243gに減少していた。
- 6月26日 ウォールケースの液浸標本保存液の補充を行い、再展示した。
- 6月27日 マアジ140尾(全長12-13cm)を白浜漁業協同組合富田浦支所より購入し、226号水槽(「群れをつくる小魚とニシキエビ」)に展示した。また、袋湾内の筏付近でアンドンクラゲを1個体採集し、5%ホルマリン標本とした。この標本は後にゲル保存液に浮かべ、ウォールケースに展示した。
- 7月 5日 ヤイトハタ老成魚(413-2号水槽・長期飼育記録更新中)が死亡した(全長126.0cm・体長107.6cm・体高31.2cm・頭長45.2cm・湿重33kg)。1966年2月入館時には、全長33cmであった。昨年7月以来、摂餌頻度が激減し、最近では6月12日より摂餌の確認がなく、やせが目立ってきていた。
- 7月 5日 予備水槽のオニカマスが死亡した(全長81.2cm・体長70.4cm・体高11.4cm)。1994年9月以降、他の10尾のオニカマスと共に飼育していたもので、最後に残った1尾であった。白浜町袋湾産で、当時は、全長約20cm。
- 7月 5日 209号水槽(「節足動物 甲殻綱 フジツボ・カメノテ」)の石組みで自然繁殖したヒメイソギンチャクを駆除するために、24時間淡水張りとしてイソギンチャクを殺し、翌日再展示した。しかし3日後には、依然、40個体ほどが生残しているのを確認した。

- 7月11日 202号水槽内のクラゲ用吊り水槽の展示を、ミズクラゲの死亡に伴い、予備水槽で飼育していたサカサクラゲ3個体に変更した。
- 7月11日 「さまざまなクラゲ」と題した写真パネル(縦47cm, 横365cm)を、第3水槽棟ウォールケース対面側の壁面に掲示した。10種のクラゲを、12枚のカラー写真で示すと共に、種毎に250字程度の解説を付した。写真と解説は久保田 信助教授の撮影・執筆による。
- 7月11日 204号水槽(「環形動物 ゴカイ綱」)の大掃除を行ったが、この際ゴカイ展示用の区画に収容していたオニイソメをうまく回収することができず、4断片にちぎれてしまった。断片を合計した全長は140cm, 湿重130gであった。代りに、水槽下部の石組み中に潜んでいたオニイソメ(湿重245g, 全長は測定せず)を展示した。水槽は、壁面に付着したマメホネナシサンゴやチギレイソギンチャクを駆除するために淡水を張り、二日間放置して洗浄した後、再展示した。
- 7月14日 ミドリシャミセンガイ17個体(奄美大島産・柗 昭太院生および白山義久所長採集)を、砂を入れた塩化ビニール製容器に埋めて、228-4号水槽に展示した。餌は、アミやアジ肉などを配合したミンチを一日2回水槽に溶かし込んで与えた。11月1日には15個体の生存を確認した。
- 7月19日 214号水槽(「棘皮動物 ウミユリ綱」)に淡水を二日間張り、イソギンチャクを駆除した。
- 7月25日 ヒラマサ3尾(全長95-105cm)・カンパチ1尾(全長117cm)が、開館前に、101号水槽で死亡しているのを発見した。この水槽で飼育している魚のうち、もっとも大型の魚が突然死亡したことから、高水温が関係して、昨夕のアジ餌給餌後の一時的な酸素欠乏が原因であると思われた。水温は28.5℃であった。
- 7月25日 202号水槽内のクラゲ用吊り水槽の展示を、サカサクラゲからタコクラゲに変更した。タコクラゲは、白浜町袋湾から採集した17個体で、傘径が1-5cm。サカサクラゲ3個体は予備水槽に戻した。11月17日には、タコクラゲはまだ12個体が生存していたが、ほとんど成長していないように思われた。
- 7月30日 オニヒトデ1個体(直径20.5cm・湿重365g・串本産・富山大学4年生松原未央子氏提供)を215号水槽へ展示した。
- 7月31日 302号水槽の中央に透明の仕切り板を設け、従来のカワリギンチャク類とは別に、やや深みにすむヒトデ類を展示することとし、ヤマトナンカイヒトデ1個体とアカモンヒトデ5個体を展示した。
- 7月31日 第2水槽棟の無脊椎動物展示水槽で、自然繁殖する小型イソギンチャクやニホンウミケムシを駆除するために収容していた魚類を一年振りに更新した。イソギンチャク駆除用としてイシダイ幼魚各1尾を203・207・209・214・220号水槽へ、ニホンウミケムシ駆除用としてカワハギ幼魚各1尾を205・206・212・215・217・218・219号水槽へ収容した。従来の魚は、カワハギ(206・207・216・218・219号水槽)が全長15-27cmに成長し、411-3号水槽(「フグ目」)と予備水槽に移した。また、215号水槽のソウシハギが全長約40cmに成長し、408号水槽(「水族館」)に移した。
- 8月 2日 ユウレイクラゲ1個体(傘径40cm・田辺湾産)を、202号水槽クラゲ用吊り水槽に収容したが、5日に死亡した。この間、前に展示していたタコクラゲ17個体は、屋上温室の予備水槽へ収容した。
- 8月 3日 オオウナギ1尾(全長約65cm)の飼育を白浜町教育委員会から依頼され、淡水予備水槽に収容した。白浜町江津良の溝で採捕したとのこと。
- 8月 5日 第4水槽棟第2循環系統の魚類に軽度の白点病を確認したので、硫酸銅(280g)を投薬した。なお、406号水槽は、普段は第2循環系統に含まれるが、カスザメや

- ウチワザメ、サカタザメなど軟骨魚類を飼育しているため、これらの魚類の硫酸銅による薬害を逃れるために、投薬期間中は開放式システムとした。
- 8月22日-9月3日 大型ハタ(413-2号水槽)が相次いで死亡した。8月22日と27日にクエ各1尾(全長142cm・体長121cm・湿重41.9kgおよび全長111cm・体長94cm・湿重34.8kg)、9月1日にヤイトハタ(全長98cm・体長87cm・湿重25.0kg)、9月3日にタマカイ(全長119cm・体長102cm・湿重36.8kg)が死亡した。
- 8月29日 オオウミウマ2尾・ヨウジウオの1種2尾(田辺湾産)の提供を、曾輪保男氏(白浜町)から受けた。
- 8月30日-10月11日 ヘダイ・カスミアジ・オキフェダイなど、12種52尾の幼魚(白浜町安久川川口産)とマハゼ12尾(白浜町寒サ浦産)の提供を、荒賀忠一氏(白浜町)より5回に及び受けた。
- 9月29日 スギ1尾(全長65cm, 湿重2.8kg)を白浜漁業協同組合(瀬戸漁港)より購入し、101号水槽(「軟骨魚類と中・大型回遊魚」)へ展示した。
- 10月 5日 メガネウオ(305号水槽・4月28日に展示)が、入館後初めてアジ切り身を餌刺し棒から摂餌したが、かなり痩せが目立ってきた。
- 10月 5日 タテヒダイボウミウシ1個体(体長5cm)の提供を、嶋景三氏(白浜町)より受けた。
- 10月11日 201号水槽(「刺胞動物 花虫綱」)の漏水修理(ガラス縁のシリコン打ち直し)と、岩組みに棚や段を追加するため、展示を中断した(11月2日まで)。展示していたイシサンゴ類15群体とサンゴイソギンチャク10個体は屋上培養室へ仮収容した。
- 10月19日 404号水槽(「内湾・川口」)で、展示魚類の更新を行った。成長した魚類は、適当な水槽に分収した。新しく収容した幼魚の大部分は、夏以降に川口で釣獲したものである。
- 10月21日 ユウレイクラゲ1個体(傘径46cm・田辺湾産)の提供を、丸中商店(鮮魚店)より受けた。翌日、403号水槽(「岩礁」)に展示した(10月30日死亡)。
- 10月23日 403号水槽(「岩礁」)で水抜き大掃除をし、展示更新をした。成長した魚は該当する各水槽へ移し、この秋に採集しておいたソラスズメダイやオヤビッチャなど、サンゴ礁魚類の幼魚を収容した。ガンガゼ類33個体(殻径6-8cm)は、実験所の北浜に放流し、新たに採集した小型のもの(殻径2-4cm)10個体を収容した。
- 11月14日 401号水槽(「干潟」)に温風機を取り付け、サーモスタットを24℃に設定して加温を開始した。
- 11月14日 408号水槽(「水族館」)で、ゴマモンガラ(全長約45cm)に背鰭などを噛られたナンヨウツバメウオ1尾を予備水槽に隔離した。12月1日にもナンヨウツバメウオ1尾を隔離した。
- 11月21日 シロタスキベラ1尾(♀)を、白浜漁業協同組合富田浦支所より購入し、303号水槽(「白浜沿岸の珍しい動物」)に展示した。
- 11月29日-12月11日 221~224, 404~411-3号水槽の大掃除を行った。水を抜き、底砂や水槽内壁、ガラスなどを洗浄した。
- 11月29日 予備水槽に収容していたリンボウガイ15個体とハリサザエ12個体を、302号水槽の深みにすむヒトデ類と共に展示した。
- 11月30日 ユウレイクラゲ1個体(傘径約45cm)の提供を、丸中商店より受け、403号水槽へ展示した(12月4日死亡)。
- 12月 5日 229号水槽(「磯の生物」)の水を抜き、大掃除した。成長したメジナ類は、411-1号水槽(「スズキ目」)と屋外水槽へ分配した。
- 12月 6日 クラゲ用吊り槽のエアレーションが止まり、7月25日より展示を続けていたタコ

- クラゲ3個体が死亡した。水槽洗浄後、予備水槽で飼育していたサカサクラゲ2個体を展示した。
- 12月13日 マルアジ40尾(全長約17cm)、ハチビキ45尾(全長約17cm)を、白浜漁業協同組合富田浦支所より購入し、226号水槽(「群れをつくる小魚とニシキエビ」)へ展示した。
- 12月21日 エゾニチリンヒトデ1個体(陸奥湾産)の提供を、松原未央子氏(富山大学4年生)より受けた。
- 12月22日 214号水槽(「棘皮動物 ウミユリ綱」)で、自然繁殖した小型ノソギンチャクを駆除するために、淡水を張った。25日に復旧、再展示した。
- 12月28日 226号水槽(「群れをつくる小魚とニシキエビ」)の給水口8箇所のうち、上方の3箇所にエアホースを取り付け、空気を水流とともに噴出させるようにした。強力な瀑気を行い、アジ類の眼球突出症を予防するためである。

## 5. 生物観察メモ(水槽・野外)

- 1月5日 オオウミウマ1尾(全長10cm)を、白浜町寒サ浦の実験所船艇用桟橋で、手網で採集した。ロープに付着するフサコケムシのしげみに潜んでいたものである。また、3月28日には同所で、ヨウジウオ1尾を同様に採集した。
- 1月12日 228-4号水槽で、石に付着したキクスズメガイを展示中であるが、成貝に混じって多数の仔貝が認められるようになった。
- 4月 6日 白浜町江津良港内の水深約1.5mの砂底にオサガニ属の1種2個体を停泊中の漁船から観察したが、採集できなかった。周辺には巣穴らしきものがいくつか認められた。
- 4月20日 第3水槽棟の予備水槽で、ハッキガイ3個体がオオナルトボラ1個体に群がり、殻口より吻を挿入して捕食していた。
- 4月27日 予備水槽の中につけた隔離容器中で飼育中のニシキテッポウエビ1個体(1996年7月に付近の砂底から採集)が、依然として生存しているのを確認した。少なくとも3年以上生きたことになる。1996年-1999年にダテハゼと共生させて展示していたが、ダテハゼの死後、予備水槽で飼育していたものである。
- 5月25日-26日 ケヤリ1個体を、204号水槽(「環形動物 ゴカイ綱」)の底石の上に収容・展示したところ、約10分後には姿を消した。底石の間に潜むオニイソメが捕食したものと考えられたため、翌日、水槽にアミ汁を混入して食欲をそそり、オキアミを餌にして釣糸(釣針金袖3号、ハリス1.5号)を垂らしてみた。まもなくオニイソメが石の隙間から現われ、釣針にかかったが、口が切れて逃がしてしまった。以前にも、ケヤリやホンケヤリが、展示直後に姿を消したことがあったが、このオニイソメの仕業であったと思われる。一方、石灰質の棲管をもつオオナガレハナカンザシが捕食されることはなかった。このオニイソメは7月11日に水槽掃除の際に取り出し、展示用として、別のケースの中に収容した(4. 収集・飼育・展示参照)。
- 7月12日 オオアカヒトデ1個体(第3水槽棟予備水槽)が放精する様子を観察した(13:30-14:00)。水槽壁面に付着した状態で体中央部と腕の先端部を持ち上げ、各腕の側面部から白い精液がにじみ出て、約1tの水槽が白く濁った。
- 7月28日 長期飼育していたニシキウミウシ(228-4号水槽)が死亡した。本年1月14日、南部町堺港のエビ網干場で採集したものである。
- 8月10日 オヨギイソギンチャクが、白浜町寒サ浦桟橋の係留ロープに多数付着していた。20個体ほどを採集し、402号水槽(「藻場」)に展示した。
- 8月14日 サンゴイソギンチャク12個体(403号水槽)の白化が急激に進行した(ここ数日の

飼育水温は約27.5℃)。

- 9月19日 長期飼育のオオカイカムリ(♂, 甲幅13cm, 211号水槽)が死亡した。1998年12月15日に入館したもので、当時の甲幅約10cmであった。飼育期間中に少なくとも1度の脱皮を確認した。
- 9月19日 13:30頃, 101号水槽で、ギンガメアジ1尾(全長約50cm)の体色が黒っぽく変色し、他の同種個体を追尾しているのが観察された。産卵に至ったかどうかは不明。
- 10月 3日 ホンダワラコケムシが、白浜町寒サ浦棧橋の係留ロープに多量に付着していた。一部の群体を採集し、228号水槽に展示した。
- 10月 9日 エラブウミヘビ(全長120cm・湿重880g・死亡個体)が実験所の南浜に漂着した。
- 11月 2日 ハナガササンゴ1群体(201号水槽)に付着していた4個体の巻貝(殻長約2cm)を同定したところ、クチュラサキサンゴヤドリガイであった。同定後、水槽の底砂の上に1個体を置いたところ、5時間後には、砂上約30cm上方の石段の上に置かれたハナガササンゴに戻っていた。砂上にはこの貝が這ったと思われる跡が、真直ぐハナガササンゴの方向に残っていた。
- 11月22日 シマキッカイソギンチャク1個体(201号水槽の底砂上に開く)が、石組みの方からすぐそばに伸びてきたサンゴイソギンチャクを避けるように、元の場所から20cmほど移動した。
- 11月26日-30日 11月26日、サンゴモ類がびっしりと付着した石10個(直径10-20cmを番所崎の潮間帯で採取し、403号水槽(「岩礁」)の石組みの上に置いてみた。28日14時の観察では、3個の石でサンゴモ類はすっかり刈り取られ、サンゴモ類が残っている他の石には、シラヒゲウニ・ラッパウニ・トクリガンガゼモドキが乗っていた。また、ハクセンスズメダイ・ネズズメダイ・ニシキベラが、サンゴモ類が残っている石の表面を盛んにつつく行動も観察された。22時の観察では、ウニ類のほかに、ニシキウズガイ・ヤクシマダカラガイがこれらの石に群がっていた。11月30日には、すべての石でサンゴモ類がすっかり刈り取られてしまっていた。
- 12月 4日 ハリセンボン270尾の死亡個体(全長77-111mm)が、実験所の北浜一帯に漂着した。
- 12月26日 アオウミガメ一頭の死亡個体(甲長83cm)が、実験所北東側の浜に漂着した。計測後、その場に埋めた。

## 6. その他

- 6月21日 第3水槽棟と第4水槽棟との隙間にできたシロアリの巣を、業者が駆除した。
- 10月 3・13日・12月15日 第1水槽棟3階に保管してある標本を、総合博物館に移管するにつき、運送業者が搬出調査に訪れ、案内した。
- 12月19日 第1水槽棟3階の魚類液浸標本・ウミガメ剥製・岩石標本および宿舍前に置かれていたイワシクジラ骨格標本を、運送業者が梱包・運び出し作業を行い、総合博物館への移管が終了した。